



武久出版 1800円＋税

『琵琶湖にはじめて蒸気船を浮かべた 一番丸船長 一庭啓二の生涯』

著・岡村敬二

1869(明治2)年に琵琶湖に最初の蒸気船「一番丸」が登場した。それまでの琵琶湖の水運は主に風を動力とする和船が担ってきたが、いよいよ石炭を燃料とする動力船が就航した。その登場の立役者が、同船の建造に携わり、船長として直接の運航に携わった一庭啓二である。

本書は、彼の生涯を詳細に追った伝記本であり、かつ琵琶湖の汽船水運の歴史をまとめた学術書でもある。著者は大阪府立図書館に長年勤め、その後、京都のいくつかの大学で教鞭をとった岡村敬二氏であり、巻末には関連文書の目録が57ページにもわたって掲載されている。本書では、まず大津百艘船として知られる琵琶湖の和船による水運から説き起

琵琶湖汽船水運の立役者

こし、一庭が蒸気船「一番丸」そして「二番丸」をいかにして建造し、運航したのかについて様々な資料調査に基づいて解き明かす。そして、その後の乱立する競合会社との戦いと、陸上交通の整備に伴う琵琶湖の汽船海運の終焉までを丁寧に追っている。

こうした混乱の中で、一庭が汽船経営の一線からは身を引き、その後は一船長として幾隻もの船を指揮すると共に、俳句、書画骨董そして写真等を好む一文人としての生涯を自ら選んで歩んだとある。

9章からなる本書の後半の7章からは、一庭の文化人として生き方と、その家族の物語にも及び、まさにファミリーヒストリーとなっている。

本書の「むすび」には、1969(昭和44)年に京阪電気鉄道によって執り行われた一番丸就航百周年記念に招待された一庭の孫娘である加藤菊枝の話がでてくる。

彼女は一庭の家を継いだ3女である陸の意思を継いで、一庭の資料を後世に残すという大事な役割を果たすとともに、自身も短歌を詠み、文芸に親しんだという。

明治という激動の時期にたくましく生きながらも、自らの人生も謳歌した一庭敬二の生き方に触れ、また彼を敬愛する家族の物語を知り、琵琶湖の涼風にあたるような清々しさを感した。(池田良穂・大阪府立大学名誉教授)